

白舟 白舟

第18卷 (昭和20年) 12月號

卷頭語

永村清

戦争は吾等の信念を空にして完全なる敗北をもつて終つた。今年8月15日終戦の大詔拜して吾等一億臣民はすべて地に伏して慟哭し忠誠の至らざりしに慚愧せざるものは無い。思ふに三千年の光輝ある皇國の歴史を一段落として更に新たなる國家を再建せねばならぬ未曾有の國難に遭遇し、單に敗戦といふ悲慘事に加へて父祖來三千年間吾人の血の中に流れ傳はつたる思索の方向を180度轉換しなければならぬこととなつた。正に非常時である。しかも戦争四年を顧みるとき、二ヶ年を経過したる一昨年の秋米國が航空母艦を主隊とする機動部隊を編成して南西太平洋に反攻し來り、我はその制空戦に敗れ、ガダルカナル島より敗退轉進して以來戦勢は必ずしも好轉せず、殊にマリアナ群島を失つてからは聯合軍の進攻は頗るその速度を加へ來り、同時に我が本土に對する空襲は次第に激化し慘害は日を逐うて増大しB29の爆音を聞

きては萬民安き心地もなしといふ有様となつた。事實はこの當時までに既に相當の海上輸送力を失ひ多分の影響を受けゐたる軍需生産は戦局の一段の急迫と共に本年に入りては逆に愈々困難の度を加へ、また戦争の長期化に伴ふ民力の疲勞も漸く顯著となり、このまま長期戦を戦ひ抜くことは頗る憂ふべき状態を示し來つた。終戦後の臨時議會に於て東久邇首相官の御説明の中に次の如き一節がある。

「本年五月頃の状況におきまして汽船輸送力は船舶喪失量の増大と數次に互る船腹の南方抽出等に依り、開戦當初の使用船腹の概ね四分の一程度を保持するに過ぎず、しかも液體燃料の不足と聯合國軍の妨害激化等に依つて運航能率は著しく阻害せられ、殊に海峽戰の終末以來聯合國軍航空機の威力の増大に伴ひ大陸との交通すらも至難の状態に立到り、一方機帆船輸送力も燃料不足と聯合國軍の妨害

目次

卷頭語	永村清	117
【座談會】 戦時造船を顧る		
鋼造船	山縣昌夫・小野暢三 山中三郎・榊原敏止	119
木造船	山縣昌夫・渡邊浩 山根貞一・瀧山敏夫	131
木船電造講座(終)	高木淳	145

天然社發行

昭和十五年十月二十日 第三種郵便物認可
昭和二十年十一月二十日 發行
昭和二十一年一月二十日 發行

に因つて急激に減少し、新船の建造及損傷艦船の補修亦意の如く進捗せず、海上輸送力の斯の如き機能の低下は戦力の維持に甚大なる影響を與ふるに至り。云々」

敗戦の原因は獨り海陸輸送力の激減にのみあるのでは無く、現代戦争の様相は吾人が目の當り見たる通り直接には航空機の勢力如何に因るのであるが、今回の戦争は單なる陸海又は空軍の直接の戦闘をもつて終るものではない。直接の戦闘には勝つても軍需品の補給が不十分であれば、長期間その勝利を持続することは出来ない。しかして今日の戦争が如何に多量の物資を消耗するものであるかは、「今日の戦争は消耗戦である」といはれることによつて判断することが出来る。かくて消耗戦は補給戦であり輸送戦となるのである。即ち現時の戦争は原料輸送戦であり、製品輸送戦であり、食糧輸送戦であり、軍器輸送戦である。従つて我國の輸送力の急激なる低下減少は戦力を極度に弱体化せしめたことが事實である。

輸送力には陸海空の三相あることは勿論であるが、海上輸送がその大部分を占むることは申すまでもない、殊に四面環海の我が島國にあつては輸送の最大量を海上輸送に依存するのである。海上輸送は船腹の多少に關する。船腹の多少は船舶建造補修の能力如何にある。我國の船舶建造補修の技術は近年世界の水準を越えて優に先進國を凌駕しつつあつたのであるが、大戦

數年に亘るに及んで何故に前記の如く輸送力の激減を來したか、我等の技術は信念を缺ける手工に過ぎなかつたか、或は造船行政ともいふべき政策指導經營に於て不備不足の點ありしか、かかる疑惑に對し吾々造船支術に携はるものは一人残らずその因つて來る原因を究明し、吾等の力及ばざりし點を反省し敗戦に對する責を謝し、再びその轍を踏まずして新興新日本の第一道標となるべく努力を絶對必要とするものである。即ち吾々は再建は輸送から、造船からを絶叫するものである。

第一次世界大戦終了後、我が國の造船は質量ともに向上し將に先進國を追越さんとしてゐたが、支那事變勃發とともに國內資材配給と海運との狀況が著しき變化を來たし、その結果は船腹の不足となり、今次大戦開始となつては愈々その不足が深刻となつて、官といはず民といはず造船界は少なからず焦躁の状態となり、急遽標準型船を制定し、工作を簡易にし建造日數の短縮を計り、造船事業の統一推進の目的に造船統制會を創設し、更に所謂造船議會と呼ばれし臨時議會をも開催して産業設備營團をして造船の經理事務に當らせ、鐵鋼材の不足に基因する鋼船の補足としては木造船を奨励し、官民一致大奮となつて造船促進に努めたが船腹の増加は前記の通り必ずしも所期の如くならず、遂に終戦となつたのである。

(130頁よりつづく)

たわけです。

【山縣】十九年度は幾ら出來たですか。

【山中】昨年度はやつと200萬噸ぐらゐ——そこまで行つてゐないでせう。

【小野】160萬噸ぐらゐか。

【山縣】空襲なんかの場合、退避やなんかで造船能力は落ちたでせうね。

【山中】それはうんと減つてる、退避ばかりでなく、家庭がみなやられるので、それで減るのが非常に多い、親類の者が死んだとかなんだとかいつて出て來ない、それから疎開をする、或ひは荷物の疎開をする、さういふのが非常に影響します。

【山縣】僕は、自分が疎開をしなかつたから言ふの

ぢやないですが、日本を敗戦に導いた一つの大きな原因は一般人の疎開なりと言つてゐるんだ、あの仕事を放つて家財などを運んだお蔭でどれだけ戦力が低下したかわからんですね。

【山中】勿論さうですよ。

【榊原】それから夜業が出來なかつたといふのも相當影響してゐます。

【小野】大正6年7年頃は盛んにやつたですがね。

【山中】この前の歐洲大戦の時は、夜になると煌々と電氣が點いて明るいものでしたよ。

【小野】それでも初めの中はずつと夜業をやつたですよ。

【榊原】B29など出來てから殆ど駄目です。あの電弧接の火花を隠すことが出來ないです。

【記者】どうも長時間いろいろ有難うございました。